

山の日情報

(第6号)

平成28年8月17日

秋田県生活環境部
自然保護課

【活動記録】

「山の日」の制定を記念した登山が、県内各山で行われました。



・小岳

(主催：藤里町商工会ほか)



・高寺山

(主催：小坂町観光案内人協議会)



・森吉山

(主催：東北森林管理局)



・南風鞍

(主催：大仙市)



・鳥海山象潟口

(主催：秋田清掃登山連絡協議会)



・鳥海山矢島口

(主催：由利本荘市観光協会)

今年から、8月11日は「山の日」に制定されましたが、「マタギ」は12月12日を「山の神の日」として、山の神に感謝し、この日だけは山入りしないとされています。

マタギにとって、山で得るものは山神様からの授かりものであり、獲物を強欲に得ることを決して許しません。

自然を活用しつつ、調和しながら生きてきた先人の敬虔な姿勢を見習い、私たちが秋田の豊かな自然を次世代へ継承していきましょう。

【特別寄稿】

山の日に寄せて

奥村 清明

2016年から、8月11日が山の日になるという。海の日もあるから遅きに失した感もある。私は改めて、日本という国がいかにか山によって生かされているか、再考してほしいと思う。

日本は国土の67%近くが山地である。こんな国は世界にはない。フィンランドは森林率は日本より高いが、北極圏にあり、人口も500万ほどである。日本は周りを海に囲まれ、島は6,800ほど、植物の種類はダントツに多く、東京にある高尾山(599m)には1,321種類もの植物があり、これはイギリス一国より多いという。高山植物など日本ほど種類も色彩も豊かな国はない。カエデの種類はカナダの2倍もある。

戦前、日本の水産物は世界の半分も占めていた。山から流れ出す無数の川が、無機栄養塩類を沿岸に運び、プランクトンが大発生し、魚を沸かせたのである。山は自然環境の大半を形成している。その山を日本人は戦後、金儲けに狂奔するあまり、せっせと痛めつけてダメにした。山の自然環境の保全は第1次産業が担う。農業、林業、漁業であるが、そのどれもが食っていけない仕事になって久しい。これでは日本がもう絶滅危惧種だと世界中から笑われても反論は難しい。山と海の深い関係、森が人間の健康に及ぼす大きな影響など、ようやく戦後になって分かってきたことである。「森は海の恋人」であるが、「森は健康の源」でもある。

戦後、日本人は、山の上へ上へと、自動車道路やゴンドラなどを競ってやみくもに建設した。それが金儲けにつながると考えたからであろう。日本の山で人間にとっても、動物にとってももっともいいところは、山麓の樹林帯にある。現在、登山で各地の山を訪れる人々は、この樹林帯をアツという間に機械で運ばれていく。秋田県の山でも、登山する人々で、ブナという樹を知らない人がほとんどであろう。鳥海山、駒ヶ岳、八幡平、森吉山、などで登り出すのは、すべてブナ林の上部からである。

近年の研究では、樹林帯にはホモサピエンス(現世人類)を発生させたアフリカの熱帯雨林と同じく、人間の耳には聞こえない、Hypersonic sound、つまり超高周波音が降り注ぎ、これが人間の脳を活性化して元気にするという。登山してきて元気になるのはこのせいであろう。山の動物たちが元気なのは当たり前である。

秋田県には、古来、土地の住民たちが大切に守り育ててきた郷土の山が、どこにもある。ほとんどは鬱蒼とした森に覆われている。入山するのも憚れるような領域である。高い山に登っていくのもよい。しかし、こうした森の深い郷土の山こそ、人々を守り育ててきたかけがえのない、我々が自然環境なのである。郷土の山を大切にしたいと思う。

～奥村清明さんの紹介～

秋田山岳会前会長。白神山地のブナ原生林を守る会事務局長。秋田県自然保護団体連合代表理事等を歴任。

著書「秋田の山」(無明舎出版)、共著「ブナ林を守る」(秋田書房)、「ブナの山々」(白水社)等多数。

太平山前岳の山行は4,900日を重ねる。